

蚊取り線香で守る 健康で文化的な社会

金鳥(大日本除虫菊株式会社)
専務取締役 上山 久史

1 はじめに

夏になると日本人は蚊に悩まされてきました。その対策として昔から人々に使われ、なじみの深いものが蚊取り線香です。蚊が媒介する様々な病気が懸念される昨今、蚊取り線香は人々の健康を支えてきたといえるのではないのでしょうか。

2 金鳥の創業から蚊取り線香製造へ

金鳥の創業は明治18年(1885年)1月8日に創業者の上山英一郎うえやまえいいちろうが実家の紀州和歌山県有田市山田原でみかんの輸出を商売とする「上山商店」という会社を興したことから始まります。

創業の重要な契機となったのは、明治15年に創業者の上山英一郎が開国した東京に憧れ、和歌山から上京していったことにありました。彼は東京の欧文正鶴学館(サマーズスクール)という英語塾で英語を学んで英語力を身に付けると、福沢諭吉に憧れて慶應義塾に入塾しました。しかし、明治17年に脚気を患い、やむなく実家と歌山に帰省せざるをえなくなります。実はこれが大きな転機となるのです。



写真1 除虫菊

上山英一郎が故郷に帰り、「上山商店」を立ち上げてすぐにアメリカのサンフランシスコから種苗商H. E. アモアという人物がみかんの苗を求めて福沢諭吉の所へやって来ました。福沢諭吉はH. E. アモアに上山英一郎を紹介します。上山英一郎はH. E. アモアをもてなすとともに自分の農園を案内し、みかんをはじめとした農園で育てていた種や苗をH. E. アモアに渡しました。その翌年の明治19年には、上山英一郎へH. E. アモアから御礼として除虫菊の種などが送られています。この除虫菊こそが蚊取り線香の原材料なのです(写真1)。

そのころ、ヨーロッパやアメリカでは除虫菊は家畜用のノミ取り粉やシラミ取り粉として使われており、上山英一郎はそれを作って輸出することを考えていました。その後明治37年から38年にかけて起こった日露戦争では軍隊病として流行していた発疹チフスが懸念されていました。そこで上山英一郎は病の原因となるシラミを除去するために除虫菊の粉をサンプルに出したのです。それがきっかけとなり、明治39年頃に日本初のノミ取り粉メーカーとして金鳥が確立されることとなります。出発はノミ取り粉でしたが、昔から日本で一番悩まされていた虫は蚊でした。そのため、上山英一郎は除虫菊を使って蚊を駆除する製品を作ることに力を注いでいきました。

3 渦巻き型蚊取り線香の誕生

現在皆さんがご存じの蚊取り線香は渦巻きの形をしていますが、最初に誕生した蚊取り線香の形状は棒状のものでした。見た目は仏壇線香とほとんど変わりません。この棒状の蚊取り線香には大きな欠点がありました。火をつけてから40分で燃え尽きてしまうのです。これは昼間に飛んでいる蚊には対処できますが、夜間寝ている間に現れる蚊を防ぐには、不便です。長時間蚊取り線香を燃焼させるた

めにはどうすればよいか考えあぐねていた上山英一郎に、妻のゆき夫人が「渦巻き型」にしてはどうかという提案をします。こうして誕生した渦巻き型の蚊取り線香は6時間燃焼させることができました（写真2）。これなら夜間の蚊の来襲に備えることができます。ちなみに、棒状の蚊取り線香の長さが20センチであるのに対し、現在の渦巻き型は約75センチあります。このようにして渦巻き型の蚊取り線香は生まれたのです。また、この蚊取り線香は粘着性の強いので丈夫に作られているので、1メートルほどの高さから落としても壊れることはありません。ダブルコイルにしている理由も、輸送時の破損を避けるためにあります。2015年現在、蚊取り線香は1年間に約3億巻生産しています。

現在は電気式の蚊取りも普及していますが、渦巻き型の蚊取り線香は、電気式のものよりも殺虫能力が優れているといえます。といたすのも、有効成分が均等に入っているため使用中の効き目にむらがないのです。ちなみにマット式の蚊取りは12時間もちますが、使用効果にむらが出てしまいます。この点に関しては渦巻き型の蚊取り線香の方に利点があるといえます。また、屋外で活動する際にも一度点火すればそのまま使うことができるという点では電気式の蚊取りよりも手軽さがあります。

4 蚊取り線香の普及状況

蚊取り線香は日本で浸透していますが、海外にも商品が販売されています。緯度が高く涼しい地域、例えばヨーロッパやアメリカのニューヨークなどでは蚊に悩まされることがないので普及していません。普及している国は蚊の多い熱帯地方などですが、現在は中国やタイなどにも現地法人を設立して商品を展開しています。しかし、我々の暮らす日本



写真2 開発当時の渦巻き型蚊取り線香（大正8年）

は蚊の多い国です。そのため、日本向けに高品質の蚊取り線香を国内で生産することに力を入れています。

木造建築が基本だった時代からアパートやマンションが建設されていったように、日本の住宅形態は変化し、近年も高層マンションが次々と建設されています。このような住宅環境の変化にも対応できるように当社は新しい製品を開発してきました。これからの時代の変化に対応できる製品を生み出せるように現在も研究を続けております。

5 今後の展望

近年、温暖化によって気温は上昇傾向にあります。蚊が吸血活動できる気温は35度くらいまでであるといわれています。熱帯地方は蚊が生息できなくなるほど温度が上がってきているので、将来的には熱帯地方よりも高緯度にある日本に生息する蚊が増えていくことになるでしょう。つまり、蚊を媒介とした病気が日本でこれからますます増えていく可能性があるのです。とくに日本では2014年の夏にデング熱が流行し、日本中が不安の渦に巻き込まれました。そのような背景からも、病気になるリスクを減らし、人々の健康な生活を守るためにも蚊取り線香はますます欠かせないものになっていくのではないのでしょうか。そのためにもこれからの時代に応じた様々な変化に対応できる製品を開発できるように日々の研究開発に努めてまいります。